

## 中国の帯飾板における瀕死の鹿形怪獣紋

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柳生, 俊樹 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/31444">http://hdl.handle.net/2297/31444</a>

## 中国の帯飾板における瀕死の鹿形怪獣紋

柳生 俊樹

(長野市埋蔵文化財センター)

### 1. はじめに

帯飾板とは、ユーラシア草原地帯（以下、草原地帯）の東部から中国にかけて用いられた、帯の装着と装飾を同時に行う器物である。紀元前5世紀頃から草原地帯東部で発達したが、中国でも、戦国時代後期から前漢時代にかけて製作・流通が始まる。中国の帯飾板には、草原地帯の文化的影響を示す「北方的な」紋様を描写しつつ、主に長方形を呈することや紋様を浮彫で表現するなどの独創がある（志賀 2002; 小田木 2005; 盧ほか 2007; 潘 2007）。小論は、こうした中国の帯飾板に描写された、筆者が「鹿形怪獣紋」と呼ぶ紋様の中でも、特異な一群に注目するものである。

鹿形怪獣紋は、端部が耳のある猛禽（以下、有耳猛禽）の頭になる角を生やし、嘴を持った草食獣形の怪獣の紋様である（図 8）。草原地帯の西部におけるスキタイ文化に発し、山地アルタイから中国北辺を経て中国にまで伝わった（*e. g.* Jacobson 1984; Bunker 1989）。山地アルタイのパジリク文化における鹿形怪獣紋の文身は特に著名であろう。文身の紋様となっていることから考えて、鹿形怪獣は瑞獣か守護獣のようなものであったろう。

ところが、中国の帯飾板においては、そのような鹿形怪獣が、他の動物に襲われて苦しげに身体をよじった姿で描写された例がある（図 1, 2）。瑞獣や守護獣の類いが、そのような哀れな姿で描写されるのは、いかにも不合理である。なぜ、そのような描写が為されるようになったのか。その疑問が、小論の出発点である。以下、他の動物に襲われる特異な鹿形怪獣の紋様を「瀕死の鹿形怪獣紋」と称して検討を加えていく。

後に主要なものを列挙するが、瀕死の鹿形怪獣紋を描写した帯飾板は少なからず例がある。しかし、帯飾板に関連した先行研究は、いずれも、上述の山地アルタイの例などを挙げながら、鹿形怪獣が草原地帯に由来する紋様であることは指摘しても、鹿形怪獣が他の

動物に襲われることの意味については問題にしてこなかった（鄒ほか 1998; Bunker 1989; Bunker *et al.* 1970: 143, No.109; 2002: 101, 106-107; Boardman 2010: 53-54）。鹿形怪獣が、なぜ哀れな姿で描かれる必要があったのか、という筆者の疑問に対する答えは、先行研究からは得られなかった。そこで、筆者は、草原地帯と中国の双方における鹿形怪獣紋を改めて検討してみた。その結果、中国における瀕死の鹿形怪獣紋の登場は、草原地帯東部で起こった紋様変遷の動向を反映したものである、という考えに至った。ここに、問題提起として私見を提示し、識者の御叱正を仰ぎたい。

### 2. 資料

まず、筆者の注目する、瀕死の鹿形怪獣を描写した帯飾板を紹介する。紋様構成によって二種類に分けることができる。それぞれ A 類と B 類とし、以下に述べる。

#### (1) 帯飾板 A 類

長方形を呈し、鹿形怪獣の背後から二頭の異なる猛獣が襲いかかる光景を描写するもの。猛獣のうちの一頭は熊であり、もう一頭は狼のような姿である。鹿形怪獣は、前足を折り、後ろの半身を捻っており、地面に押し倒されたような状態である。鹿形怪獣の角の有耳猛禽頭が帯飾板の周縁部に配されている。通常、着装者の左側にくる飾板では、鹿形怪獣の喉元に装着用の孔が空いている。

A 類は、発掘例のなかった時代には、オルドス青銅器文化、つまり草原地帯の東南縁に相当する中国北辺に特徴的な青銅器文化に帰されていた。紋様の美しさから蒐集の対象となり、各国の博物館や個人の所蔵するところとなっている（Bunker *et al.* 2002, Nos. 68, 75; 東京国立博物館 2005: 273, 口絵 18）。しかし、

1980年代から中国における発掘例が増えてきたことによって、その性格が見直されることになった。漢字銘文を持つものもあり、中国で製作されたことは疑う余地はない。分布から見ても、流通も中国を中心とするものとみなすべきである<sup>(1)</sup>。

なお、ここに描写された鹿形怪獣は、嘴を消失していることから、草原地帯の事例と比較すると馬のような姿に見える。そのため「角を生やした馬のような怪獣」と解説されることもしばしばである。しかし、詳細に観察してみると、蹄が割れるなど馬よりも鹿に近い特徴もあり、変形（あるいは退化）した鹿形怪獣とみなして差し支えない。一方で、嘴を残しているものもあり、時期的変化が反映されているのであろう。

資料は、各国の博物館や蒐集家の所蔵例を含めると数は多いが（Boardman 2010: 53-56, No. 191-216, Pl. 27-30）、発掘例を中心に主要なものを挙げるに留める。

#### A1: 獅子山楚王陵出土例（図 1-1; 1-2）

江蘇省徐州市、獅子山楚王陵の墓道西側の W1 耳室で二対 4 点出土。全て金製。帯自体はおそらく絹製で、子安貝で装飾されていた。また、帯を留めたと考えられる一方に孔のある小さな棒を伴っていた（獅子山楚王陵考古発掘隊 1998: 17）。それぞれを A1a、A1b として以下に紹介する。

まず A1a（図 1-1）は、長さ 13.2 cm、幅 6 cm、厚さ 1.2 mm を測る。重量は、一方が 280 g、他方が 275 g である<sup>(2)</sup>。双方とも鹿形怪獣の喉元に当たる部分に孔が空いているが、着装時左側のものの方が若干大きい。裏面は、粗い布が鑄出されたような状態で、本例が「失蠟失織技法 Lost Wax and Lost Textile Process」で製作されたことを示している。また、それぞれの側面には篆書で「一斤一両十八銖」、「一斤一両十四銖」と重量が刻まれている。

次に A1b（図 1-2）は、長さ 13.35 cm、幅 5.95 cm、厚さ 3 mm である。重量は、一方が 389.5 g、他方が 359 g である<sup>(3)</sup>。こちらでは、裏面に布目は見られないようで、通常の失蠟技法によって製作されているのであろう。また、銘文も欠いている。

さて、獅子山楚王陵の被葬者は、前漢王朝の郡国制における楚の二代王劉郢客と三代王の劉戊のどちらかと報告されるが（獅子山楚王陵考古発掘隊 1998: 17）、志賀和子によれば、後者の可能性が最も高いと

いう（志賀 2002: 91, 注 19）。劉戊は、紀元前 154 年に呉楚七国の乱に加担して死んでいる。したがって、本例は、紀元前 154 年以前、紀元前 2 世紀前半のどこかで製作されたものと言える。

#### A2: 三店村漢墓出土例（図 1-3）

陝西省西安市近郊、三店村において、建設工事に際して発見された竪穴土壙墓で出土したもの。残念ながら、詳しい出土状況は明らかではない（朱ほか 1983: 22-23）。

一对で、青銅鍍金製である。長さ 11.2 cm、幅 5 cm、厚さ 1.5 mm を測る。裏面の状態については情報がなく、報告の記述と図（前掲書、図 1-1）によって鈕のあることだけが知られる。獅子山出土例と同じ紋様構成であるが、襲いかかる熊に様式的な相違が見られる。また、鹿形怪獣にも相違がある。本例では、獅子山出土例と同様に嘴を欠いているが、鼻面が曲がっているため、あまり馬らしくは見えない<sup>(4)</sup>。この点は、本例の年代的位置づけにも関連する。

墓の年代は、満城漢墓出土品に似たものが副葬品に含まれ、また五銖銭が出土していることから、前漢後期、特に宣帝・昭帝以後に位置づけられている（前掲書、25 頁）。この年代を重視すれば、本例は、紀元前 1 世紀に位置づけられ、獅子山出土例よりも遅い時期のものとなる。しかし、小田木治太郎は、この墓には様々な時期のものが混在しており<sup>(5)</sup>、墓の年代観を帯飾板に当てはめることは難しいという。そして、様式から判断して、前漢中期か、あるいは前期に遡る可能性が高いという（小田木 2005: 83）。

筆者は、小田木の見解に賛同したい。ただ、一方で前漢中期までは下らず、前漢前期に位置づけるのがより妥当と考える。本例に描写された鹿形怪獣の鼻面に、獅子山出土例のような馬らしい様子が見えない点を重視してのことで、このように先端が曲がった鼻面が、鹿形怪獣が元来持っていた嘴の名残ではないか、と考えるからである。高濱秀も指摘するように（東京国立博物館 2005: 271-272）、中国本土における鹿形怪獣の変遷が、しだいに嘴を失って馬のように見える姿になるといふものならば（図 8）、馬的な要素の濃淡を年代差と捉えることが可能となろう。そのため、本例が、様式的にはむしろ獅子山出土例と同時期か、より早い段階に位置づけられる可能性が高い、と考えるのである。



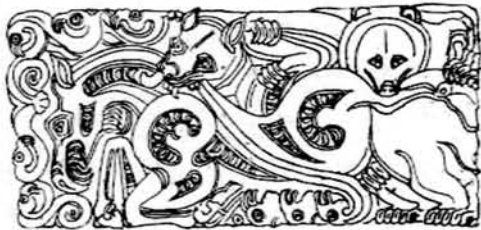
1. 徐州獅子山楚王陵出土 (A1a)



2. 徐州獅子山楚王陵出土 (A1b)



3. 西安三店村漢墓出土 (A2)



4. MIHO MUSEUM収蔵品 (A3)



5. マリーモン王立博物館収蔵品 (A4)



図1 中国における瀕死の鹿形怪獣紋の帯飾板A類 (縮尺1/2)

**A3: MIHO MUSEUM 収蔵例 (図 1-4)**

滋賀県信楽市に所在する MIHO MUSEUM には、A 類の帯飾板が二組収蔵されている (MIHO MUSEUM 1997: 216-218)。そのうちの一对がここに紹介するもので、金銀象嵌を伴う青銅製品である。長さ 14.5 cm、幅 6.6 cm を測る。裏面には布目はなく、失蠟技法によって製作されたものである。本体の鑄造後、鹿形怪獣や猛獣の毛並みや瞳を金銀象嵌で描写しており、他に類例のないきわめて珍しい例である。

本例について特筆すべきは、鹿形怪獣が、獅子山出土例などとは異なり、明確な嘴を持っている点である。その点で、この種の帯飾板の変遷を考える上できわめて重要な資料といえる。上述のように、嘴を持った鹿形怪獣が馬のような外見のものに先行するとすれば、本例は、獅子山出土例よりも早くに製作されたと考えられる。問題となるのは、獅子山楚王陵の年代から紀元前 154 年以前であることは確実であるにしても、そこからどの程度遡るのか、である。

鹿形怪獣は、いつの時点から馬のような姿になったのか。その手がかりとして、山東省章丘市に所在する洛荘漢墓 9 号陪葬坑で出土した馬面が挙げられる (図 8-7)。この馬面はアーモンド形を呈し、後脚を捻った鹿形怪獣が描写されているが、ここでは嘴は消失している。一方で、嘴を持った鹿形怪獣を描写した辻金具も出土している (図 8-6)。そうすると、遅くともこの墓の造営された頃には、鹿形怪獣紋の変化 (退化) は始まっていたと見なければならぬ。同墓は、前漢の劉邦の妻、呂後の一族の墓とされ、紀元前 187-180 年の間に造営された (済南市考古学研究所ほか 2004: 684)。とすれば、遅くとも紀元前 180 年代には、嘴を欠く鹿形怪獣の紋様が存在していたことになる。当然、嘴のある鹿形怪獣の紋様は、それ以前に位置づけられよう。

以上の点から、本例は、遅くとも紀元前 2 世紀の初め、あるいはさらに紀元前 3 世紀末まで遡る可能性もあろう。ただ残念なことに、今のところ発掘調査によって同様の例は確認されていない。今後、資料の増加が待ち望まれる。

**A4: マリーモン王立博物館収蔵例 (図 1-5)**

MIHO MUSEUM 収蔵品と同様の、嘴を持った鹿形怪獣紋を描写した例は、ベルギー、エノー Hainaut 州モルランヴェ Morlanwelz のマリーモン王立博物館

Musée Royal de Mariemont にも収蔵されている。銀行家ストックレー A. Stoclet の個人蔵品として、早くから知られていたものである (e. g. Borovka 1928)。青銅鍍金製で、長さ 14.5 cm、幅 6.7 cm を測る。現存するのは一对の片方、着装時左側のみである。側面に文字らしきものが並ぶが、稚拙で銘文の呈をなしていない (Bunker 1989: 54-55)。後の造作であろうか。MIHO MUSEUM 収蔵品と同様、裏面には布目は見られないので、通常失蠟技法によって製作されたと考えられる (*op. cit.*, 58, fig. 11)。やはり、遅くとも紀元前 2 世紀の初め、早ければ紀元前 3 世紀末に位置づけることができよう。

**(2) B 類**

長方形を呈し、周縁部に縄状の枠を持つ帯飾板で、踞った鹿形怪獣の背後から一頭の猛獣が襲いかかる光景を浮彫で描写している。同じ紋様が、上下に対称的に配置されている。鹿形怪獣は嘴を持つが、角は通常の鹿角状ではなく、U 字状に配され、先端に付く有耳猛禽の頭が向かい合っている。襲いかかる猛獣は虎のようであり、正面観描写の頭部と鹿形怪獣の腹部に食い込む前脚の爪だけが見えている。

今のところ発掘例はなく、各国の博物館収蔵品や個人蔵品のみ知られている。しかし、1) 長方形を呈する、2) 周縁部に縄状の枠を持つ、3) 紋様を浮彫で描写するといった特徴から見て、中国で製作され流通した帯飾板の一種であることだけは間違いないであろう。A 類と比べると数は少ないが、最近のボードマンの集成では、五例が該当する (Boardman 2010: 31-32, Pl. 6, 7)。個々に異なる点は少ないので、小論ではテレーズ&アーウィン=ハリス Theres and Erwin Harris 蔵品を代表例として取り上げる。また、他の例と若干異なる例として、ベルリン東洋美術館収蔵品を挙げておこう。

**B1: テレーズ&アーウィン=ハリス蔵品 (図 2-1)**

一对の品で、B 類に属する帯飾板としては、筆者の知る限り唯一の左右が揃う例である。青銅製であるが、一部に銀張りの痕跡が残っているという。一方が長さ 10.6 cm、幅 7.5 cm、他方が長さ 10.6 cm、幅 7.4 cm を測る。裏面には布目が見られ、失蠟失織技法で製作されたことを物語る。一方の飾板では、鹿形怪獣の額近くに、長円形の孔が開いている。もう一方では、



1. テレーズ&アーウィン=ハリス蔵品 (B1)

2. ベルリン東洋美術館 (B2)

図2 中国における瀕死の鹿形怪獣紋の帯飾板B類 (縮尺1/2)

同じ箇所長円形が突線で鑄出されているが、貫通はしていない。おそらく、ふたつを同じ模から製作したのであろう。

上述のように、発掘例がなく、年代推定の根拠に乏しい。ただ、鹿形怪獣が嘴を持っている点からすれば、前漢の初めより遅くはないであろう。つまり、紀元前3世紀代に位置づけられるであろう。また、鹿形怪獣紋ではなく動物闘争紋であるが、B類のように上下に対称的に紋様を配置した帯飾板は、河北省易県、燕下都辛荘頭30号墓で出土している(河北省文物研究所1996: 715, 彩版27, 28)。これらをB類と関連させれば、辛荘頭30号墓の年代観を援用できる。宮本一夫は燕国の土器・青銅器の検討にもとづいて、辛荘頭30号墓を「(紀元)前3世紀でも後半に近いし後半に入る段階」とする(宮本2000: 214)。また、石川岳彦は、紀元前3世紀後半としつつも、前漢時代まで下る可能性も考えている(石川2001: 30-33, 36)。見解は分かれるが、いずれにしても、紀元前3世紀の早い段階までは遡らないのであろう。小論では、こうした辛荘頭30号墓の年代観を参照して、本例を紀元前3世紀の中でも後半頃のものとす<sup>6)</sup>。

**B2: ベルリン東洋美術館収蔵例 (図2-2)**

青銅製で、長さ9.7 cm、幅6.7 cmを測る(東京国立博物館1997: 184, No. 218)。ドイツ、ベルリン東洋美術館に収蔵されている。周縁部に縄状の枠を有するが、本例では、それは二重になっている。裏面に布目は見られない。

本例は、他の例とは若干異なる紋様を持つ。まず、鹿形怪獣であるが、角がU字状にならず、有耳猛禽頭が二つ並んでいる。猛禽頭の下には身体を丸めた羊が配されており、嘴が身体に食い込んでいるようであ

る。また、鹿形怪獣の喉のあたりには曲がった角を生やした動物が見える。ヤギのようにも見えるが、仔細に見ると角は猛禽頭の連続のようであり、頭部も草食獣よりも肉食獣のそれのように見える。つまり、大きく表された鹿形怪獣の喉元に、別の怪獣が噛み付く光景を描写している。以上のような観察が正しければ、A類の紋様に見られるように、二頭の異なる動物が鹿形怪獣を襲っていることになる。

年代は、他の例と同様であろうが、こうした紋様の複雑さを考慮すれば、若干遅いものであろうか。紀元前3世紀後半から2世紀初めと考えておきたい。

**(3) 瀕死の鹿形怪獣紋の由来をめぐって**

以上、中国における瀕死の鹿形怪獣紋の帯飾板を挙げてきた。A類が紀元前3世紀末から2世紀前半、B類は紀元前3世紀後半であるが、一部2世紀初め頃まで下がる可能性もある。全体として、瀕死の鹿形怪獣紋は、紀元前3世紀後半に出現し、2世紀前半までは存在するものと言える。

では、このような瀕死の鹿形怪獣紋の由来は、どのように考えるべきであろうか。筆者は、当初、瀕死の鹿形怪獣紋が、中国に固有のものであると考えていた。上述のように、鹿形怪獣が瑞獣あるいは守護獣であると考え、それが襲われて苦しげに身体をよじることに違和感を覚えたからである。しかし、改めて各種資料を検索してみると、草原地帯にも中国における瀕死の鹿形怪獣紋に似たものがあることに気が付いた。類例が存在する以上、中国に固有なものとは言い切れない。両者の系譜関係など、新たな問題が生じてくる。次節以降、草原地帯の例を検討していきたい。

### 3. 草原地帯における瀕死の鹿形怪獣紋

小論では、中国の事例との比較の関係上、草原地帯東部のものが中心となる。しかし、一部、草原地帯西部の資料も挙げる。

#### (1) 草原地帯東部

##### 1. S1：木・皮革製立飾（図 3-1）

ロシア連邦アルタイ共和国のウラガン Ulagan 地区に所在する、パジリク Pazyryk 墓群 2 号墳で出土した立飾。山地アルタイ、パジリク文化の墓では、内部の凍結によって良好に保存された木製品・皮革製品・織物などが出土している。本例もその一つである。木槨内で出土したが、出土状況の詳細は明らかにされていない (Rudenko 1953: 368)。用途は不明であるが、かぶりものの頂部に付けられたか、あるいは馬の頭部を飾った器物の一部かもしれない。長さ 23 cm、幅 16.5 cm を測る。

鹿形怪獣の頭部をくわえるグリフィンの頭部から翼にかけてを描写している。グリフィンには背びれがある。鹿形怪獣は、鼻面が一部欠けている。角の先端には、しばしば見られるような有耳猛禽ではなく、鶏の頭部が付いている。グリフィンの背びれ・翼・耳と鹿形怪獣の角が皮革製、両者の頭部が木製である。グリフィンは、翼が「へ」字形を呈することや背びれの存在から見て、黒海北岸のスキタイ文化を通して伝わった「ギリシア風のグリフィン」である (林 2006: 151-159, 193-196, 200-202)。つまり、ここでは、鹿形怪獣が、外来の怪獣に飲み込まれているということになる<sup>(7)</sup>。

さて、パジリク 2 号墳の造営年代については諸説ある (林 2006: 199-200)。従来は、紀元前 5～4 世紀におく考え方が有力であった。しかし、近年では、新たに行われた放射性炭素年代測定の結果を踏まえて、紀元前 3 世紀代まで下げる考え方が有力になりつつある (e. g. Mallory *et al.* 2002; 雪嶋 2008: 41-42)。筆者自身は、理化学的見解は考古美術の側からの検討結果とも矛盾するものではないし、遅い年代の方がより妥当であり、紀元前 3 世紀まで下がっておかしくないと考えている (柳生 2008; 2011: 233)。

##### 2. S2 類：B 形帯飾板

外形が横に倒した B 形を呈する帯飾板 (以下、B 形帯飾板) で、他の動物に襲われているように見える鹿

形怪獣を描写したものをこれに当てる。ここでは、材質の相違と紋様の精粗によって S2a、S2b、S2c の三つに分つ。

##### S2a (図 3-2)

今のところ、1 点のみが該当する。1844 年頃にザバイカリエ Zabaikal'e (バイカル湖東岸) のヴェルフネウディンスク Verkhneudinsk (現在のロシア連邦ブリヤート共和国の首都、ウラーン=ウデ Ulaan-üde 市) の周辺、あるいはモンゴルのどこかで採集されたもので、現在はエルミタージュ美術館に収蔵されている (Zavitukhina 1998: 143; 林 2006: 208)。金製品で、透彫状を呈する。裏面は布目が鑄出されたような状態であり、本例が失蠟失織技法で製作されたことを物語っている。長さ 11.7 cm、幅 7.3 cm を測る。

硬直したように立つ鹿形怪獣を中心に、周辺には様々な動物や怪獣が描写されている。鹿形怪獣の前方には豹のような猛獣が小さく表され、胸のあたりに噛み付いている。鹿形怪獣の首には翼を広げた有耳猛禽の紋様が嵌め込まれるように描写されているが、これも鹿形怪獣に襲いかかっていると見るべきであろう。さらに、鹿形怪獣の胴部には、羊の頭をくわえた有耳猛禽の頭部が表されている。つまり、この例では、複数の動物 (怪獣) に襲われる鹿形怪獣を描写しているのである。

##### S2b 類 (図 3-3)

透彫状である点は S2a と同じであるが、青銅製の、より簡略な図柄のものをこれに当てる。鹿形怪獣とそれに噛み付く豹のような猛獣だけが描写されたものである。簡略であるが、それだけに鹿形怪獣とそれに噛み付く豹のような猛獣の強固なセット関係が確立していることを感じさせる。

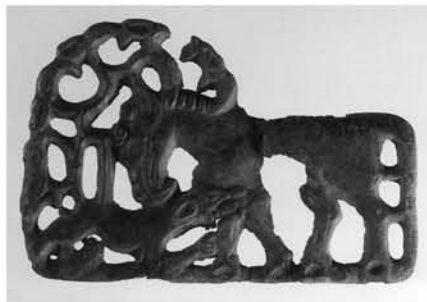
発掘調査で確認されたものはないが、モンゴル国中央部のドンドゴビ=アイマグ Dundgob' Aimag (Volkov 1967, ris. 21-1; 林 2006: 208-209)、内蒙古自治区フルンボイル Khülönbuyir (呼倫貝爾) 市のシネバルガ Sine Barga (新巴爾虎) 旗 (王ほか 2004, 図 1)、遼寧省西豊県の西岔溝墓地 (図 3-3) で採集されており、草原地帯東部におけるこの帯飾板の広がりが見える。また、各国の博物館や個人の収蔵する由来不明の資料がいくつか知られている (e. g. 東京国立博物館 1997, No. 212; cf. Boardman 2010: 75, Pl. 47, Nos. 351-354)。



1. パジリク 2号墳出土立飾



2. ヴェルフネウディンスク採集帯飾板 (S2a)



3. 西岔溝墓地採集帯飾板 (S2b類)



4. カタンダ=クルガン出土帯飾板 (S2c)



5. バヤンホンゴル=アイマグ採集帯飾板 (S3)



6. ピョートル=コレクション動物闘争紋帯飾板 (S4)

図3 草原地帯における瀕死の鹿形怪獣紋 (1を除き縮尺1/2)

このうち、発見地が他の例に比べてより限定される西岔溝墓地採集品（長さ 10.2 cm、幅 7 cm）について、若干述べておこう。西岔溝墓地は、500 基ほどの墓を含む大規模なものである。盗掘の被害が大きすぎるため考古学的な検討は難しいが、半兩銭や五銖銭、銅鏡の存在から漢代を含むことは間違いなく、しばしば匈奴あるいは烏丸に関連づけられる墓地である（孫 1960: 28）。このことから、本例を漢代のものとする見解もある（e. g. Bunker *et al.* 2002: 104）。しかし、共伴遺物があるわけでもなく、墓地の年代から帯飾板の年代は決まらないであろう。後で試みるように、帯飾板それ自体を詳しく検討しなくてはなるまい。

### S2c (図 3-4)

S2b 類と同じ図柄であるが、青銅製品ではなく木製品の 1 点をこれに当てる。ロシア連邦アルタイ共和国ウスチ＝コクサ Ust' Koksa（コクスー＝オーズ Kōk-suu Oozy）地区に所在するカタンダ＝クルガン Bol'shoi Katandinskii kurgan で、1865 年にラドロフ V. V. Radlov によって発掘されたものである（Kiselev 1951: 339-340）。長さ 18 cm、幅 10 cm を測る。全体として浮彫状に表現されるが、木製品のためであろう。また、鹿形怪獣角は、金属製品に比べて簡略化されている。

貴重な出土例ではあるが、残念ながら、年代推定に有利な資料を伴っていない。カタンダ＝クルガンでは、帯飾板の他に、木製の馬像が多数出土している（*op. cit.*, ris. 1, 3, 5-12）。キシリョフ S. V. Kiselev は、この木製馬像をノヨン＝オール Noyon Uul（ノイン＝ウラ Noin Ula）出土例と比較するなどして、カタンダ＝クルガンを山地アルタイにおけるスキタイ時代の墓の中では遅いものとみなしている。（Kiselev 1951: 341）。しかし、同様の馬像は、近年までに山地アルタイで多く出土しているので、年代を遅くする根拠とするのは難しいように思う。墓の年代が不明瞭である以上、S2b と同様に帯飾板それ自体の検討によって年代を決めなければならないであろう。

### S2 類の年代

上述のように、手がかりは乏しいが、年代推定を試みよう。特に、外形が B 形である点に着目する。

一連の帯飾板では、主題となる鹿形怪獣の角が上方と前後に半円を描くように配置されている。この点は、草原地帯における紀元前 5 世紀代の帯飾板に見られ

るような、動物の側面観を象ったものとは異なる（田ほか 1986, 図版 67, 68）。つまり、紋様に応じた形態を取るのではなく、むしろ紋様の方を B 形の外形に合わせているのである<sup>(8)</sup>。こうした手法による帯飾板は他にも例があり、ロシアのピョートル大帝が蒐集したシベリア出土貴金属製品群、「ピョートル＝コレクション」に多数含まれている（Rudenko 1962, Tabl. IV-VIII; Boardman 2010, Pl. 45-50, 田ほか 1999, 図版 44, 60-63）。そのうち、神話の一場面を描写したと考えられる「樹下戦士紋帯飾板」（田ほか 1999, 図版 60）や、あとで取り上げるような動物闘争紋帯飾板（図 3-6）は典型的なものである。前者については以前言及したように（柳生 2011: 231-233, 図 17, 18）、パジリク 5 号墳出土資料（e. g. Rudenko 1953, Tabl. XXVI-2, LXXXVIII, XCV; 田ほか 1999, 図版 56）との関連から、紀元前 3 世紀代の製作と考える。後者は、類例の検討から紀元前 2 世紀に位置づけられる（後述）。こうした例を参照すると、帯飾板の形態の変遷は、次のように把握できる。すなわち、当初は動物の側面観を象ったものが卓越するが、紀元前 3 世紀頃から B 形が加わるのである。

以上のような変遷観を念頭に、S2 類の帯飾板を見れば、紀元前 3 世紀以降の製作と考えるのが妥当である。さらに言えば、ヴェルフネウディンスク採集品に見られる有耳猛禽の翼や尾羽が、後述の S4 に見られるようなコンマ形のものとは異なるので（林 2006: 210-212）、紀元前 2 世紀まで下がることはないであろう<sup>(9)</sup>。そのため、紀元前 3 世紀のものと考えておきたい<sup>(10)</sup>。

### 3. S3 : 帯飾板

一対の帯飾板で、モンゴル国中南部、バヤンホンゴル＝アイマグ Bayankhongor Aimag のバヤンゴビ＝ソム Bayangov' Sum で採集されたものという（Batsaihan 2004: 55, No. 147, 148）。青銅鍍金製で、裏面には布目があり、失蠟失織技法で製作されたことを示す。長さ 12.6 cm、幅 7.1 cm を測る<sup>(11)</sup>。

二頭の怪獣に噛み付かれる鹿形怪獣を描写する。襲いかかる怪獣はそれぞれ狼のような姿で、鬣の末端、耳、尾の先に有耳猛禽の頭の付き、さらにそり上がった鼻面の先も有耳猛禽の頭のように見える。一頭が前脚の付け根、もう一頭が後脚の付け根に噛み付いている。

本例に似たものが、内蒙古自治区オルドス Ordos (鄂爾多斯) 市のオルドス博物館に収蔵されているが (鄂爾多ス博物館 2006: 176)、今のところ考古学的調査によって確認されたものはない。そのため資料的位置づけは困難であるが、鹿形怪獣に襲いかかる狼のような怪獣を手がかりにすれば可能である。

鼻面の反り上がった狼、あるいは狼のような怪獣の紋様は、ピョートル=コレクションに含まれる品々にしばしば見られ (Rudenko 1962: 32, ris. 35; 林 2006: 207)、後述の S4 にも描写されている (図 3-6)。発掘例も少なくない。例えば、内蒙古自治区ウランチャブ Ulaanchab (烏蘭察布) 市所在の阿魯柴登 (田ほか 1986: 343, 346, 図版 16, 49)、西溝哇 2 号墓 (前掲書, p. 354, 図版 116, 118, 119)、河北省易県燕下都辛莊頭 30 号墓 (河北省文物研究所 1996: 715, 彩版 27) である。これらは、一般的に戦国時代後期 (紀元前 3 世紀) とされる。より遅い例としては、ノヨン=オール 6 号墓から出土した毛氈に描写されたものがある (梅原 1960: 63-67, 図版 19)。この例は、6 号墳における建平 5 年 (紀元前 2 年) 銘の前漢製漆器耳杯 (前掲書, p. 30, 図版 59) との共伴によって、紀元前 1 世紀頃のものと考えられる。伝世の可能性も指摘されるが (林 2006: 212)、そうであっても紀元前 2 世紀を遡ることはないであろう。以上のように、鼻面の反り上がった狼、あるいは狼のような怪獣の紋様は、紀元前 3 ~ 1 世紀に渡っている。

こうした例を参照すれば、帯飾板 3 は紀元前 3 世紀以降に位置づけることができる。S2 類と変わらない年代のものであろう。

#### 4. S4 : 動物闘争紋帯飾板

ピョートル=コレクションに含まれる一対の B 形帯飾板。発見地は不明であるが、製作地は草原地帯東部、特に南シベリアあるいは西シベリアあたりであろう。金製で、長さ 19.5 cm、幅 13.3 cm を測る。

紋様は複雑で、合計 4 頭の怪獣が描写されている。すなわち、1) 有耳猛禽の頭が付いた尾を生やす豹のような怪獣、2) 斜め上方の翼と尾羽がコマ形の有耳猛禽、3) 鼻面がそり上がった狼のような怪獣、4) さらに以上の三者に挟まれた草食獣形の怪獣、である。最後の怪獣は、豹のような怪獣に首を、狼のような怪獣に背中を噛み付かれ、さらに有耳猛禽に頭部を鷲掴みにされている。

この草食獣形の怪獣が、鹿形怪獣ではないかと筆者は考えている。というのも、角は見られないが、鋭い嘴を持っており、さらに尾の先端に有耳猛禽の頭が付くなど、わずかながら鹿形怪獣の特徴を備えているからである。そのため、本例も、不明瞭ながら瀕死の鹿形怪獣紋の一種と考えたい。

こうした複数の動物や有耳猛禽を含む怪獣が絡み合い争う光景を描写した B 形の帯飾板は、類例も少ない。ピョートル=コレクションにも含まれるほか (Rudenko 1962, Tabl. IV-3)、出土例もある。例えば、陝西省銅川県の棗廟村墓地 25 号墓 (陝西省考古研究所 1986: 9, 図 4-17) や、ザバイカリエの匈奴墓地、ディレストウイ Dyrestui 墓地 7 号墓 (Minyaev 1998: 85, Tabl. 2-16, 17) で出土している。後者では、紀元前 118 年初鑄の五銖銭が共伴している。したがって、墓の造営年代は、紀元前 118 年を遡ることはなく、むしろ 1 世紀まで下るであろう。ここに副葬された帯飾板の製作年代も、それに近いが、遡っても紀元前 2 世紀代に収まるであろう。

S4 の年代については、紀元前 4 ~ 3 世紀とされることもある (e. g. 田辺ほか 1999: 347, No. 61; 林 2006: 211)。しかし、上述のような類例を参照すれば、紀元前 2 世紀あるいはそれ以降と考えるのが妥当である。

#### (2) 草原地帯西部

中国から遠くはなれた草原地帯西部にも、わずかながら瀕死の鹿形怪獣紋の類例が認められる。草原地帯東部のものと関連があるのかどうか、今の筆者には判断が付かないが、参考までに挙げておきたい。

##### 1. S5 : フィリッポフカ Filippovka 1 号墳 (図 4-1)

フィリッポフカ墓群は、ロシア西部のオレンブルク Orenburg 州の州都オレンブルクから 100 km ほど西、ウラル河とイレク河の合流点近くに位置している。1986 年 ~ 1990 年に調査されたもののうち、最も大きな墳丘を持つのが 1 号墳である。羨道を持つ墓壙は盗掘されていたが、南側にある羨道や、西側の 2 基の宝物壙から 600 点以上の遺物が出土した。

瀕死の鹿形怪獣紋を描写した器物は、1 号宝物壙から出土した。木製容器を装飾した金製飾板である。左側に鹿形怪獣がおり、その右側の豹のような猛獣が鹿形怪獣の鼻面に噛み付いている。豹のような猛獣は、



1. フィリッポフカ1号墳



2. イリチェヴェ1号墳6号墓坑

図4 草原地帯西部における瀕死の鹿形怪獣紋（縮尺不同）

後半身を振り上げる捻体形式を取る。

フィリッポフカ1号墳は、黒海北岸における後期スキタイ文化の資料と比較され、また、鉄製長剣など初期サルマタイ文化の特徴を示す遺物の存在から、紀元前4世紀に位置づけられる（Pshenichniuk 2000: 29-30）。

**2. S6：イリチェヴェ Illichevo 1号墳6号墓坑（図4-2）**

クリミア半島の東端（ウクライナ、クリミア自治共和国レーニン Lenin 州）にあるイリチェヴェ（イリイチェヴォ Illichevo）村周辺の墓群のうち、最も副葬品の多い墓が1号墳である。10基の墓坑があったが、スキタイ時代のものは6号墓坑のみであった。そこから出土した箆の金製飾板に、瀕死の鹿形怪獣紋が見られる（Leskov 1968:158, 162-165）。

中央に大きく鹿がおり、飾板の上端部にそって猛禽の頭が列を為している。ちょうど頭部のあたりの破損が激しく細部がはっきりしないが、角を生やす鹿形怪獣を描写しているとみなしてよいであろう。鹿形怪獣の臀部には猛禽が嘴を突き立て、首には熊のような猛獣が噛み付いている。さらに前方から蛇が襲いかかっている。

このような瀕死の鹿形怪獣紋を描写した器物は、黒海北岸においては他に類例がない。ただ、鹿形怪獣紋については、報告で指摘されているように（*op. cit.*,

164-165）、ジュロフカ Zhurovka 401号墳（Jacobson 1984, Pl. 6）、アク＝メチェト Ak-Mechet（Piotrovsky *et al.* 1986, Pl. 101）、エリザヴェトフスキー＝クルガン Elizavetovskii kurgan（Artamonov 1969, pl. 323）などで見られる。これらは紀元前5世紀代に位置づけられる。また、紀元前4世紀代には鹿形怪獣紋は見られなくなるので、イリチェヴェ出土例も5世紀代に収まるであろう。ただ、この墓では、黒海北岸のスキタイ文化の墓でしばしば出土し、年代推定に重要な手がかりを与えるギリシア陶器などは見られない。そのため、細かな年代推定は難しく、位置づけには問題を残している。

**3. まとめ**

以上、草原地帯における瀕死の鹿形怪獣紋について、東部の事例を中心に述べてきた。東部においては、S1を除いて、全て帯飾板に描写されている。年代的には、それらは紀元前3世紀代を中心とする。一部、紀元前2世紀まで下る可能性があるが、中国の事例よりもわずかに早いものである。

**4. 瀕死の鹿形怪獣紋の出現**

ここからは、前節において列挙した草原地帯東部における瀕死の鹿形怪獣紋について、出現の契機を考えたい。資料の都合上、山地アルタイを中心とすること

をお断りしておく。

### (1) 瀕死の鹿形怪獣紋の年代的位置

まず、瀕死の鹿形怪獣紋が、鹿形怪獣紋全体の中でどのように位置づけられるのかを見ておこう。

草原地帯東部における鹿形怪獣紋は、紋様の起源と展開を考慮すれば、おおよそ紀元前 4 世紀頃には出現しているであろう。山地アルタイより東の地域における鹿形怪獣紋は、先に若干触れたような、草原地帯の西部、黒海北岸のスキタイ文化における同様の怪獣紋につながっていく。これらは、紀元前 5 世紀代に多く、4 世紀にはほとんど存在しなくなるものである (Jacobson 1984: 114-116)。こうした年代観は、製作年代を明らかにし得るギリシア陶器との共伴関係にもとづいて組み立てられたもので、信頼性は高い。そうすると、草原地帯東部における鹿形怪獣紋の出現年代は、当然、紀元前 5 世紀が上限となる。一方、鹿形怪獣紋は、山地アルタイから中国北辺を経て、中国にも伝わっている (図 8 参照)。こちらの例も、草原地帯の例に比べて年代を明らかにしやすいという利点がある。中国においても、遅くとも鹿形怪獣紋は紀元前 3 世紀前半には出現している。これによって、草原地帯東部における鹿形怪獣紋の出現の下限は紀元前 3 世紀におくことができる。したがって、上述のように、紀元前 4 世紀には出現していたと考えるのである<sup>(12)</sup>。

これに対して、瀕死の鹿形怪獣紋はどうかと言えば、紀元前 3 世紀以降に位置づけられる。つまり、どの程度の差であるかは不明瞭であるとは言え、瀕死の鹿形怪獣紋は、鹿形怪獣紋全体の中では遅く位置づけられるのである。後で述べるパジリク文化 (社会) の文身を見てもわかるように、多くの鹿形怪獣紋は、単独で描写されることが多い。複数が並立することがあっても、他の動物あるいは怪獣に襲われることはない (襲うこともない) と言ってよい。時が経つにつれて、襲われる姿で描写されるようになったのである。

そうした変化には、どのような契機があったのか。以下、山地アルタイにおける文身の紋様を手がかりに考えてみよう。

### (2) 文身に見る紋様の変遷

パジリク文化の墓では、内部の凍結によって、衣服

をはじめ皮膚や毛髪までもが良好に遺存した被葬者遺体が発掘されており、それによって文身を彫る習俗があったことが明らかになった。1948 年、パジリク 2 号墳において、男性被葬者の文身が初めて確認された (図 5-1)。その後、1993 年にはアク=アラハ Ak-Alakha 3 号墓地 1 号墳では女性の (図 5-3)、1995 年にはヴェルフ=カルジン Verkh-Kal'dzhin 2 号墓地 3 号墳においても男性の (図 5-4)、それぞれ文身を彫った被葬者遺体が発掘された。さらに、近年、被葬者遺体の再調査によってパジリク 2 号墳の女性被葬者 (図 5-2) とパジリク 5 号墳における男女の被葬者 (図 6) も文身を彫っていたことが明らかになり、文身の見られる被葬者遺体は 6 体を数えるに至った (Barkova *et al.* 2005)。このうち、小論にとって特に重要なのが、パジリク 5 号墳の被葬者に彫られた文身である。

#### 1. パジリク 5 号墳の被葬者の文身

1949 年に発掘されたパジリク 5 号墳の被葬者は、55 歳の男性と 50 歳の女性であった。彼らの遺体は、皮膚も遺存してはいたが、状態が悪く黒ずんでいたため文身の存否が確認できなかった。ところが、再調査において赤外線写真撮影が行われたことで、はじめて文身の存在が明らかになったのである (Barkova *et al.* 2005: 48)。しかも、その紋様は、上述のような、これまで知られていたものとは大きく異なっていた。国内では、古い資料や 1990 年代の発見されたものに比べてよく知られていないと思われるので、紹介を兼ねて詳しく述べよう。

#### 男性被葬者の文身 (図 6-1)

残存状態がよくないが、左肩、右腕、左右の親指、腰、左脛、右足首に彫られていることがわかる。詳細は以下の通りである。

左肩 背中にかけて、豹のような猛獣を大きく描写する。前脚には連続する弧線と渦巻きを組み合わせた紋様<sup>(13)</sup>で埋められている (図 6-1a)。

右腕 上腕には、後半身を振り上げた有蹄類動物が描写されている。尾と鼻面の部分が欠けているが、馬であろうか。この草食獣の臀部には、ふたつの歪んだ三角形の間にコンマ形を配した紋様<sup>(14)</sup>が施されている (図 6-1b)。前腕には、後半身を振り上げた馬と、肉食獣の後半身が見える。残存状態が悪いが、動物闘争紋を描写していたのかもしれない。

左右の親指 それぞれ鳥が描写されるが、尾羽から



図5 パジリク文化における文身の紋様

判断して鶏であろう (図 6-1d, e)。

腰 ほとんど残っていないが、草食獣(?)の脚のようなものが見える (図 6-1f)。

左脛 五頭の草食獣が列を為している。先頭は鹿で、角のない羊が三頭続き、最後尾は有角の羊が描写されている (図 6-1g)。

右足首 山羊のような草食獣が二頭見える (図 6-1h)。

### 女性被葬者の文身 (図 6-2)

左右の前腕、左手、左右の薬指に彫られている。男性の文身と比べると紋様ははっきりとしている。詳細は以下の通りである。

左前腕 動物闘争紋。有耳猛禽が鹿を襲い、首の後ろに嘴を突き立てる光景を描写する。鹿は、後半身を振り上げている。鹿の顔の部分欠けているが、残存状態は良い (図 6-2a)。

右前腕 二組の動物闘争紋。一方では、虎が鹿に飛びかかり、喉元に噛み付いている。他方では、二頭の異なる猛獣が鹿を襲っている。前方から飛びかかるのは虎で、鹿の喉元に噛み付く。後方からは豹が飛びかかり、鹿の背中に噛み付いている。虎、豹ともに、縞や斑点を詳細に描写する。鹿は後半身を振り上げている (図 6-2b)。

左手 親指から甲にかけて鶏が描写されている (図 6-2c)。

左右の薬指 それぞれパルメットのような紋様が彫られている。右薬指では、さらに十字形も彫られる (図 6-2d, e)。

こうした紋様を、以前から知られていた資料と比較してみると、次のような相違に気付く。まず、パジリク 2 号墳、アク＝アラハ 3 号墓地 1 号墳、ヴェルフ＝カルジン 2 号墓地 3 号墳の事例においては、図 5 に示すように、鹿形怪獣紋が通有のものであった。しかし、パジリク 5 号墳では、男女ともにそれが全く見られない。そもそも、こちらでは有耳猛禽を除いて怪獣の紋様が存在しないのである。また、パジリク 5 号墳の女性被葬者の文身には動物闘争紋が見られるが、他の事例にはほとんどない。パジリク 2 号墳の男性被葬者とアク＝アラハ 3 号墓地 1 号墳の事例に、不明瞭ながら認められる程度である。

では、このようなパジリク 5 号墳の例と他の四例との相違は何に由来するのであろうか。

## 2. 鹿形怪獣紋から動物闘争紋へ

文身の紋様に見られる類似や相違を評価する際に注目されるのは、パジリク 2 号墳、パジリク 5 号墳、アク＝アラハ 3 号墓地 1 号墳、ヴェルフ＝カルジン 2 号墓地 3 号墳の相対編年である。幸いなことに、これらの墓では墓室の構築に多くの丸太が使われており、しかも凍結によってそれらが良好に保存されていたので、早くから年輪年代測定が行われていた。測定結果にもとづいた相対編年が、ほぼ確立しているのである<sup>(15)</sup>。

それによると、上述の 4 基の中では、最も早く構築されたのはパジリク 2 号墳であり、最も遅いのはパジリク 5 号墳である。両者の年代差は、49 年あるいは 50 年である。アク＝アラハ 3 号墓地 1 号墳とヴェルフ＝カルジン 2 号墓地 3 号墳は、パジリク 2 号墳の造営後、約 20 年してほぼ同時に造営されたという (Barkova *et al.* 2005: 58)。つまり、4 基の造営は、パジリク 2 号墳→アク＝アラハ 3 号墓地 1 号墳→ヴェルフ＝カルジン 2 号墓地 3 号墳→パジリク 5 号墳の順に行われたのである。

これを念頭に文身の紋様を見ると、鹿形怪獣紋を彫った文身は早い方の 3 基に認められ、最も遅いパジリク 5 号墳にはない。一方、動物闘争紋は、早い方の例には認められず、遅い方にだけ認められる。したがって、鹿形怪獣紋と動物闘争紋の関係は年代差であり、しかも鹿形怪獣紋が早く、動物闘争紋が遅いことがわかる。つまり、鹿形怪獣紋は時期が下るにつれて廃れていき、その代わりになったのが、主に猛獣と草食獣を構成要素とする動物闘争紋であった、と言えるのである。

### (3) 動物闘争紋盛行の背景

では、山地アルタイにおいて、鹿形怪獣紋に代わって動物闘争紋が盛行する背景はどのようなものであろうか。一般に、早い時期に置かれるバンシュアダル Bash-Adar 2 号墳、トウエクタ Tuekta 1 号墳、同 2 号墳には、こうした動物闘争紋は見られない。したがって、在来の文化に由来するものではないと考えられる。

それについて、文身の新資料を報告したバルコヴァ L. L. Barkova とパンコヴァ S. V. Pankova は、中国とその周辺からの影響を想定している。文身の動物闘争紋について、1) 複数の動物が襲いかかるとい構成

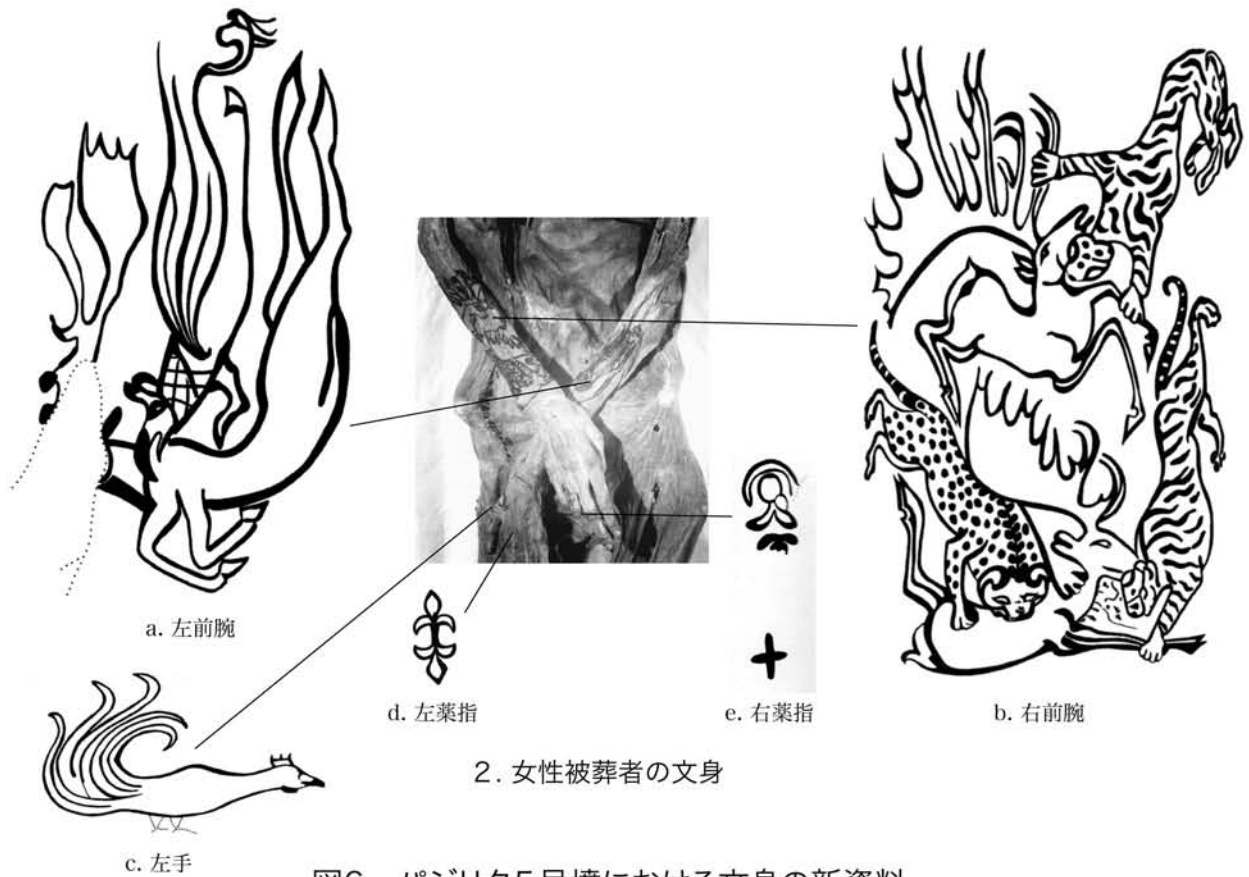
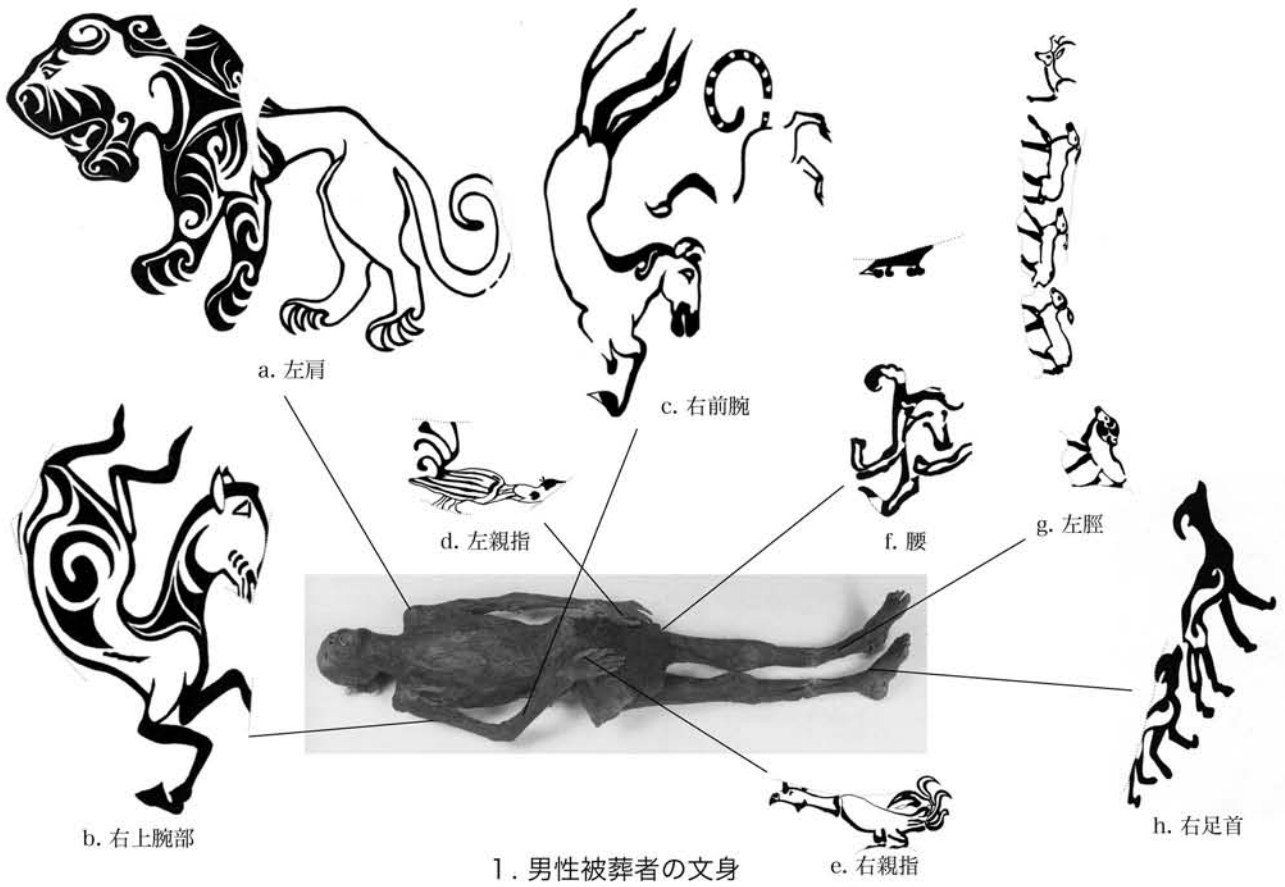


図6 パジリク5号墳における文身の新資料



1. ソロハ第二次墓葬



2. ブラトリュビウスキー＝クルガン

### 図7 グレコ＝スキタイ文化の動物闘争紋

は、雲南省晋寧県石寨山墓地で出土した多くの青銅器に描写された動物闘争紋に類似する (e. g. 張 1998: 84-87, 図版 91-96)、2) 襲いかかる動物の姿勢、特に後脚の配置は、漢代の方格規矩四神鏡や獣帯鏡に見られる白虎のそれに共通する (e. g. 岡村 1984, 図 12, 図 13-1, 2, 3)、3) 虎の縞の表現は、内蒙古自治区の西溝畔 2 号墓出土帯飾板に描写されたそれに最も近い (e. g. 田ほか 1986: 352, 図 2, 図版 63-2)、という指摘を踏まえてのことである。さらに、こうした紋様に認められる中国やその周辺との結びつきは、パジリク墓群に絹や山字紋鏡など中国で造られた品々が入っていることと相関する現象と捉える。そこに新しい時代の潮流を見出し、文身の新旧紋様の相違が生じた背景としている (Barkova *et al.* 2005: 57-58)。

しかし、筆者は、バルコヴァとパンコヴァのおこなった紋様の比較にはあまり説得力を感じない。逆に、西方とのつながり、具体的には黒海北岸のスキタイ文化、特にその後期 (グレコ＝スキタイ文化) とのつながりが強いように思える。というのも、文身の動物闘争紋における、一頭の猛獣が一頭の草食獣を襲う光景と、互いに異なる二頭の猛獣が一頭の草食獣を襲う光景を並べるという構成が、後期スキタイ文化の貴金属器にしばしば認められるからである (図 7)。ここに挙げたのは、ソロハ Solokha 第二次墓葬出土のフィアラ杯 (図 7-1) とブラトリュビウスキー＝クルガン Bratoliubiv's'kyi Kurhan 出土の儀礼用具 (図 7-2) である。いずれにおいても、1) 一頭の猛獣が一頭の草食獣を襲う光景、2) 二頭の同種の猛獣が一頭の草食獣を襲う光景、3) 二頭の互いに異なる猛獣が一頭の

草食獣を襲う光景、の三種が描写される。こうした例の方が、バルコヴァとパンコヴァの挙げた資料よりも文身の動物闘争紋に近いように思う。

グレコ＝スキタイ文化とパジリク文化のつながりは、植物紋や怪獣紋 (ギリシア風グリフィン) の存在から注目されてきた (Azarpay 1959: 324-327)。グレコ＝スキタイ文化では、動物闘争紋が非常に盛行している。ギリシア風グリフィンも、多くの場合、動物闘争紋を構成する。それは、パジリク文化でも同様である。したがって、ギリシア風グリフィンがパジリク文化に入った際にも、動物闘争紋の構成要素として入った可能性が高い。そうであれば、黒海北岸との文化的接触の中でグレコ＝スキタイ文化に特徴的な動物闘争紋がもたらされ、パジリク文化で受容されたと考えた方が、中国やその周辺の事例を持ち出すよりも自然である。

草原地帯東部における動物闘争紋の盛行の背景は、以上のようなものであったと筆者は考える。こうした背景があって、動物闘争紋が鹿形怪獣紋にとって代わることになったのであろう。

#### (4) 瀕死の鹿形怪獣紋の出現

以上のことを総合すると、瀕死の鹿形怪獣紋の出現過程は、次のようなものであったと考えられる。鹿形怪獣紋は、文身の紋様に採用されるなど、元来は吉祥あるいは辟邪の意味を持った重要な紋様であった。ところが、おそらく黒海北岸の後期スキタイ文化に由来するところの動物闘争紋の盛行があり、次第に鹿形怪獣紋を駆逐していき、文身の紋様にも用いられなく

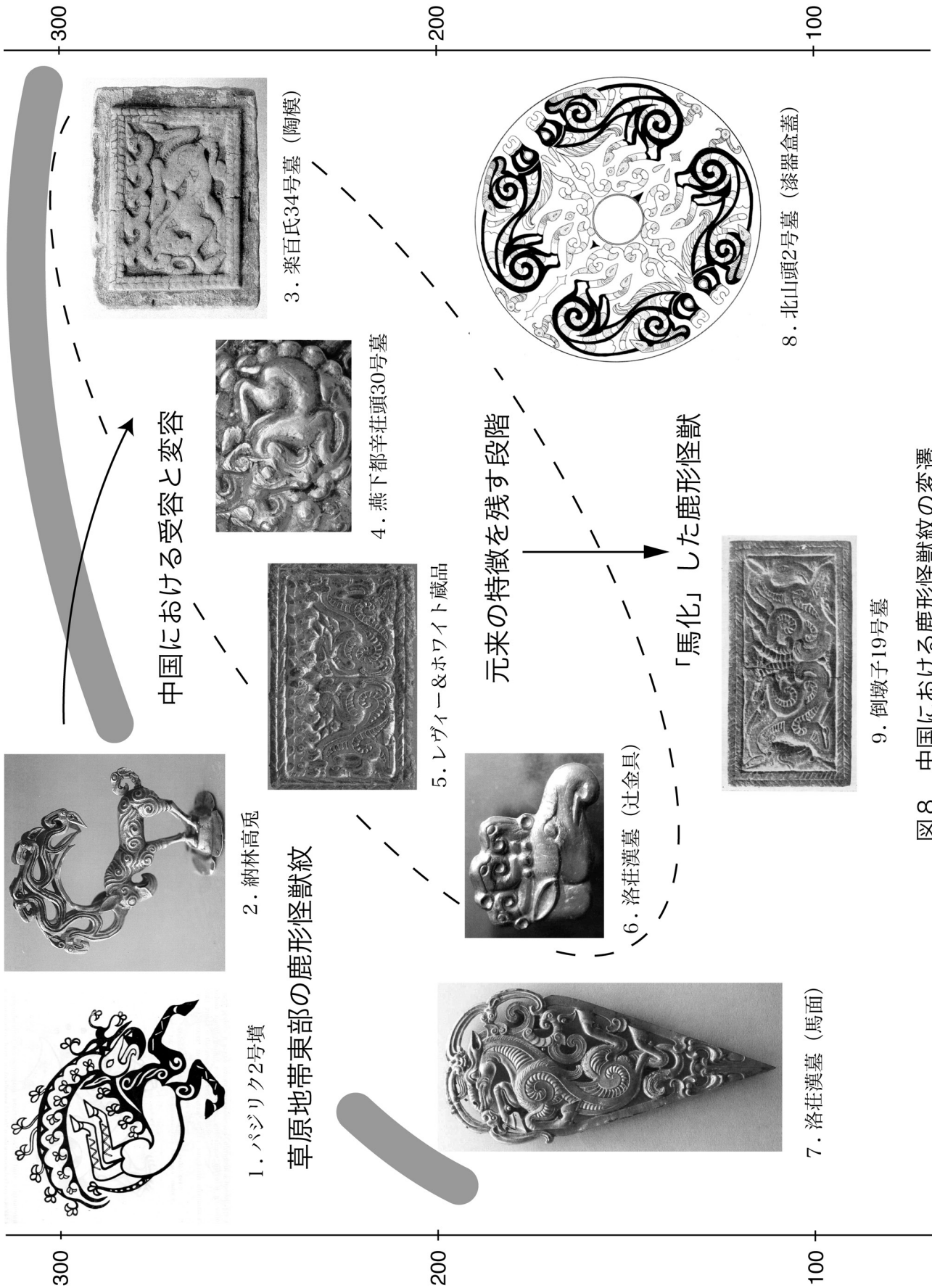


図8 中国における鹿形怪獣紋の変遷

なった。そうした中で、鹿形怪獣は、最新の流行である動物闘争紋に取り込まれていく。ついには、その構成要素となって、瀕死の鹿形怪獣紋が生まれたのである。

### 5. 草原地帯東部から中国へ

ここで、改めて中国における瀕死の鹿形怪獣紋の帯飾板を見てみよう。先行研究は、鹿形怪獣が他の動物に襲われている光景が描写されていることに対して、注意を払ってこなかった。しかし、前節までにおいて述べてきたように、草原地帯にも同様の紋様があり、しかも、それは新たな流行に押されて鹿形怪獣が変質したものと考えられる。このことは、紋様を取り巻く環境が変わったということである。そうであれば、鹿形怪獣が襲われているということに、文化史的な意味を見出さなくてはならない。

では、中国における瀕死の鹿形怪獣紋の出現の契機はどのように捉えられるであろうか。筆者は、草原地帯での鹿形怪獣紋の変質に連動したのと考えたい。中国におけるこの紋様の帯飾板は、紀元前3世紀後半に出現し、2世紀前半まで存在している。草原地帯東部における出現にわずかに遅れるものと言える。したがって、草原地帯東部から中国への伝播を想定しても、資料上の矛盾はない。また、S2類の帯飾板のように、山地アルタイからモンゴル高原東部に至る広い分布を持った資料もある。これは、草原地帯東部におけるこの紋様の広がりをも暗示している。さらに進んで、この紋様の広がりの余波が中国にも及んだと考えることも、決して不自然ではないであろう。中国において、瀕死の鹿形怪獣紋が見られるのが帯飾板のみであることも、この際参考になろう。

また、瀕死の鹿形怪獣紋を中国における鹿形怪獣紋全体の中に位置づけてみると、やや遅れて出現することがわかる。両者の系譜関係を前提にすれば、伝播の様相は次のようなものが考えられる。すなわち、いったん鹿形怪獣紋を受容したあと、草原地帯東部における紋様の変化に接して、改めて瀕死の鹿形怪獣紋を受容したと考えられる。草原地帯東部の動向が、さほど時を置かずして中国に反映されたのだとすれば、両者の恒常的な接触を示す一例となる。

### 6. おわりに

小論では、中国における鹿形怪獣紋のうち、他の動

物に襲われて苦しげに身体をよじる姿を取ったものを「瀕死の鹿形怪獣紋」と称し、その由来を求めて草原地帯東部の類例を検討してきた。そして、草原地帯東部における瀕死の鹿形怪獣紋の出現について、動物闘争紋の盛行に伴って鹿形怪獣紋が廃れるとともに、動物闘争紋の一構成要素として取り込まれていったことによる、と考えた。さらに進んで、草原地帯東部で形成された瀕死の鹿形怪獣紋が、中国へも伝播したと考えた。立論の根拠は十分ではなく課題も多いが、ひとまず問題提起としてまとめた次第である。

問題点を残しつつも、小論の視点は、草原地帯と中国との交流のあり方を見ていく上で有効なものと考えられる。戦国時代後期以降、草原地帯の文化に関連づけられる資料が中国に入るようになる。それによって、両地域の交流が論じられているが（崔 2002; 喬 2004; 郭 2006）、その際、草原地帯の文化が固定的に捉えていなかったであろうか。特に紀元前3世紀の草原地帯東部は、後の匈奴による統合に向かって揺れ動いていたと思われ、流動的なものと見るべきであろう。中国における帯飾板も多様な紋様を持つが、それは中国における製作地の多様性ばかりでなく、影響を与えた草原地帯の側の事情も関係しているかもしれない。資料の不足などの問題はあろうが、今後も様々な資料の移り変わりを細かく検討していく必要がある。

### 註

- (1) 中国外で出土した例もある。例えば、ウラル山脈の南方に位置するオレンブルグ Orenburg 州南部、ボクロフカ 2 墓地における 17 号墳の 2 号墓壙で出土している。被葬者の左側で矢筒の上に載った状態で出土した。出土例からすると、本例は、帯飾板としてではなく、矢筒の装飾あるいは留具のような機能を果たしていたようである (Davis-Kimball et al. 1995/96: 6-7, Pl. 5)。この例以外に、現中国新疆ウイグル自治区のカシュガルで、同じ紋様の帯飾板が採集されたという情報がある (Dittrich 1963: 180)。詳細は不明であり、ボードマンの言うように疑わしい (Boardman 2010: 53)。
- (2) 法量について、報告 (獅子山楚王陵考古発掘隊 1998: 17) と帯飾板の専論 (鄒ほか 1998: 37) で異なっているが、実物を調査する機会を得なかったこともあり、筆者はどちらが正しいのか判断できなかった。そこで小論では、長さ・幅・厚さについては『中国文明国宝展』の記述 (東

- 京国立博物館 2004, No. 63) に依拠し、重量のみ専論の記述によった。
- (3) 長さ・幅・重量については『世界四大文明：中国文明展』の記述（鶴間 2000, No. 75）に依拠し、厚さのみ専論の記述によった。
- (4) 公表された写真資料は不鮮明であるが、2008 年 12 月、西安市陝西省歴史博物館を訪れた際に陳列された本例を観察し、馬の鼻面らしくない点を確認した。
- (5) 前漢後期の特徴を示すものがある一方で、西周後期あるいは春秋後期から戦国時代に遡る青銅器も含まれている（朱ほか 1983: 23, 図 2, 図版 5-2, 図版 6-4）。
- (6) 燕下都辛荘頭 30 号墓では、さらに興味深い飾板が出土している。長さ 5.8 cm、幅 3.7 cm と帯飾板としては小さすぎるが、報告書における記述と簡略な図によると、牛のような角を生やした馬が対称的に描写された飾板である（河北省文物研究所 1996: 723, 図 419-2）。紋様の配置は似るが、襲いかかる猛獣や角の先端の猛禽頭を欠く。しかし、非常に残存状態が悪いので、B 類に属する帯飾板であった可能性はないだろうか。仮にそうであれば、B 類の帯飾板の年代に辛荘頭 30 号墓の年代（紀元前 3 世紀後半）を当てはめる、より強い根拠となろう。詳細を知りたいところであるが、今後の新たな発見に期待するほかなさそうである。
- (7) ただ、出土状況が明示されていないので、現状が元来の姿を反映しているのか、あるいは整理にあたって復元されたものなのか（とすれば、どの程度の根拠にもとづいているのか）がわからない。このように解釈してよいのか、不安がなくもない。
- (8) 描く対象によって形態を決めるのではなく、形態に対象の描かれ方が影響されるという点は、中国で製作された長方形帯飾板に見られる表現方法に通じるところがある。
- (9) S2a の複雑さは、後述する S4 やそれに関連する例に通じるものが感じられる。S2a は、それらの直前に位置づけられる祖型のようなものと言えるかもしれない。
- (10) ザヴィトウーヒナ M. P. Zavitukhina は、ヴェルフネウディンスク採集品の年代を紀元前 5～4 世紀とする（Zavitukhina 1998: 147）。このような年代観は、2000 年代までは一般的なものであったようで、カタログの解説にもしばしば見られる（Aruz et al. 2000, No. 210）。ザヴィトウーヒナは、鹿形怪獣紋の類例をバジリク 2 号墳の被葬者の文身に求め、同墓の年代観を帯飾板に当てはめている。関連資料の年代観が、本文中で述べた筆者

- のそれとは異なるために生じた相違にすぎないとも言える。ただ、本文中で明らかにしていくように、筆者は、この帯飾板の瀕死の鹿形怪獣紋と、文身に描写された鹿形怪獣紋は、性格の異なるものであると考えている。したがって、筆者としては、暦年代のみならず、年代推定の手法についても賛同できない。
- (11) 2004 年秋、所蔵者バトサイハン Ts. Batsaikhan 氏の御好意で、手に取って観察する機会を得た。ここに記して、バトサイハン氏と、紹介者のエルデネバートル D. Erdenebaatar 氏に謝意を表したい。
- (12) 山地アルタイにおけるバジリク墓群よりも早い時期の墓である、バシユアダル Bash-Adar 2 号墳、トゥエクタ Tuekta 1 号墳、同 2 号墳の出土品には鹿形怪獣紋は見られない（Rudenko 1960 参照）。そのため、鹿形怪獣紋の出現が紀元前 5 世紀まで遡ることはないであろう。
- (13) このような紋様は、中国の帯飾板にしばしば見られるものに似ている（e. g. 図 1, 2）。
- (14) ハカーマニシュ朝美術、あるいはそれに影響を受けた中央アジアや、草原地帯の動物紋に見られる筋肉表現を思わせる（林 2006: 120, 180-181, 192-193）。しかし、文身の紋様では初めてのものである。
- (15) 残念ながら、暦年代はまだ確定していない。そのために放射性炭素年代測定が繰り返し行われ（e. g. Mallory et al. 2002; 林 2006: 199-200; 雪嶋 2008: 41-42）、また考古美術の側からも年代推定が試みられているのである（柳生 2008; 2011: 233）。

## 文献目録

### (和文)

石川岳彦

2001 「戦国期における燕の墓葬について」『東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室紀要』16: 1-58.

梅原末治

1960 『蒙古ノイン・ウラ発見の遺物』東洋文庫

江上波夫、加藤九祚（監修）

1992 『スキタイ黄金美術展：ウクライナ歴史宝物博物館秘蔵（展覧会図録）』日本放送協会

NHK 大阪放送局

1992 『中国の金銀ガラス展：正倉院の故郷（展覧会図録）』NHK 大阪放送局

岡村秀典

1984 「前漢鏡の様式と編年」『史林』67 (5): 1-42.

小田木治太郎

2005 「北方系長方形帯飾板の展開：西安北郊秦墓出土鏤型の分析から」『中国考古学』5: 79-94.

志賀和子

2002 「漢代北方地域における帯金具の変遷」『中国考古学』2: 87-109.

田辺勝美、前田耕作(編)

1999 『世界美術大全集東洋編第15巻: 中央アジア』小学館

鶴間和幸(監修)

2000 『世界四大文明: 中国文明展』(展覧会図録) NHK 東京国立博物館(編)

1997 『大草原の騎馬民族: 中国北方の青銅器』(展覧会図録) 東京国立博物館

東京国立博物館ほか

2004 『中国国宝展』(展覧会図録) 朝日新聞社

東京国立博物館(編)

2005 『東京国立博物館所蔵 中国北方系青銅器』東京国立博物館

林俊雄

2006 『グリフィンの飛翔: 聖獣からみた文化交流』(ユーラシア考古学選書) 雄山閣

MIHO MUSEUM(編)

1997 『MIHO MUSEUM 南館図録』MIHO MUSEUM

宮本一夫

2000 「戦国燕とその拡大」『中国古代北疆史の考古学的研究』中国書店, pp. 205-235.

柳生俊樹

2008 「パジリク墓群の年代」『オリエント』51 (2): 177-78.

2011 「天山北方地域における前1千年紀の鏡」草原考古研究会(編)『鏡の研究: ユーラシア草原の祭器・什器』(ユーラシア考古学選書) 雄山閣, pp. 191-253.

雪嶋宏一

2008 『スキタイ騎馬遊牧国家の歴史と考古』(ユーラシア考古学選書) 雄山閣

(中文)

安徽省文物考古研究所他

2007 『巢湖漢墓』文物出版社

崔大庸

2002 「洛荘漢墓9号墓陪葬坑出土北方草原風格馬具試析」『中国歴史文物』2002 (4): 16-25.

鄂爾多斯博物館(編)

2006 『鄂爾多斯青銅器』文物出版社

郭物

2006 「洛荘漢墓9号坑所出部分馬具及其相關問題」『漢代考古与漢文化国際学術研討会論文集』pp. 383-401.

河北省文物研究所

1996 『燕下都』文物出版社

河南省商丘市文物管理委員会他

2001 『芒碭山西漢梁王墓地』文物出版社

済南市考古研究所他

2004 「山東章丘市洛荘漢墓陪葬坑の清理」『考古』2004 (8): 675-688.

盧岩、単月英

2007 「西漢墓葬出土の動物紋腰飾牌」『考古与文物』2007 (4): 45-55.

寧夏文物考古研究所他

1998 「寧夏同心倒墩子匈奴墓地」『考古学報』1988 (3): 333-356.

潘玲

2007 「矩形動物紋牌飾の相關問題研究」『伊沃加城址和墓地及相關匈奴考古問題研究』科学出版社, pp. 161-94.

喬梁

2004 「中原、南方所見匈奴文化影響」山東大学東方考古研究中心(編)『東方考古』第1集, 科学出版社, pp. 276-289.

陝西省考古研究所

1986 「陝西銅川棗廟秦墓發掘簡報」『考古与文物』1986 (2): 7-17.

2006 『西安北郊秦墓』三秦出版社

獅子山楚王陵考古發掘隊

1998 「徐州獅子山西漢楚王陵發掘簡報」『文物』1998 (8): 4-33.

孫守道

1960 「匈奴西岔溝文化古墓群的發現」『文物』1960 (8/9): 25-32.

田広金、郭素新

1986 『鄂爾多斯式青銅器』文物出版社

王成、沙宝帥

2004 「内蒙古呼倫貝爾草原發現青銅器」『考古』2004 (4): 1-9.

張增祺

1998 『晋寧石寨山』雲南美術出版社

中国美術全集編輯委員会(編)

1988 『原始社会至戦国雕塑』(中国美術全集雕塑編1) 人民美術出版社

中国青銅器全集編輯委員会(編)

1995 『北方民族』(中国青銅器全集15) 文物出版社

朱捷元、李域錚

1983 「西安東郊三店村西漢墓」『考古与文物』1983 (1): 22-25.

鄒厚本、韋正

1998 「徐州獅子山西漢墓的金扣腰帶」『文物』1998 (8): 37-43.

(歐文・露文・モンゴル文)

Artamonov, M. I.

1969 *The Splendor of Scythian Art: Treasures from Scythian Tombs*, New York.

Aruz, J. et al. (eds.)

2000 *The Golden Deer of Eurasia: Scythian and Sarmatian Treasures from Russian Steppes*, New York.

Azarpay, G.

1959 Some Classical and Near Eastern Motifs in the Art of Pazyryk, *Artibus Asiae* 22 (4): 313-339.

- Barkova, L. L., Pankova, S. V.  
2005 Tatuirovka na mumiyakh iz bol'shikh Pazyrykskikh kurganov: Novye materialy, *Arkheologiya, etnografiya i antropologiya Evrazii* 2 (22) : 48-59.
- Batsaikhan, Ts.  
2004 *Mongol nutgaas oldson ernii nüüdelchdiin urlagiin dursgal*, Ulaanbaatar.
- Boardman, J.  
2010 *The Relief Plaques of Eastern Eurasia and China: The 'Ordos Bronzes', Peter the Great's Treasure, and their Kin*, Oxford.
- Borovka, G.  
1928 *Scythian Art*, London.
- Bunker, E. C.  
1989 Dangerous Scholarship: On Citing Unexcavated Artefacts from Inner Mongolia and North China, *Orientalia* 20 (6): 52-59.
- Bunker, E. et al.  
1970 "Animal Style" Art from East to West, New York.  
2002 *Nomadic Art of the Eastern Eurasian Steppes: The Eugene V. Thaw and Other New York Collections*, New York.
- Davis-Kimball, J., Yablonsky, L. T.  
1995/96 Excavations of Kurgans in the Southern Orenburg District, Russia: Questions Concerning the Northern Silk Route, *Silk Road Art and Archaeology* 4: 1-16.
- Dittrich, E.  
1963 *Das Motiv des Tierkampfes in der altchinesischen Kunst*, Wiesbaden.
- Jacobson, E.  
1984 The Stag with Bird-Headed Antler Tines: A Study in Image Transformation and Meaning, *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities* 56: 113-80.
- Kiselev, S. V.  
1951 *Drevnyaya istoriya yuzhnoi Sibiri*, Moskva.
- Leskov, A.M.  
1968 Bogatoo skifskoe pogrebenie iz vostochnogo Kryma, *Sovetskaya Arkheologiya* 1968 (10): 158-65.
- Markoe, G.  
1981 *Ancient Bronzes Ceramics and Seals: The Nasli Heeramaneck Collection of Ancient Near Eastern, Central Asian and European Art*, Los Angeles.
- Mallory, J. P. et al.  
2002 The Date of Pazyryk, In Boyle, K. et al. (eds.) *Ancient Interactions: East and West in Eurasia*, Oxford, pp. 199-211.
- Minyaev, S. S.  
1998 *Dyrestuiskii mogil'nik*, Arkheologicheskie pamyatniki Syunnu 3, Sankt-Peterburg.
- Piotrovsky, B. et al.  
1986 *Scythian Art: The Legacy of the Scythian World, Mid-7th to 3rd Century B. C.*, Leningrad.
- Polos'mak, N. V.  
2001 *Vsadniki Ukoka*, Novosibirsk.
- Pshenichniuk, A.  
2000 The Filippovka Kurgans at the Heart of the Eurasian Steppes, In Aruz et al. 2000, pp. 21-30.
- Reeder, E. D. (ed.)  
1999 *Scythian Gold: Treasures from Ancient Ukraine*, New York.
- Rudenko, S. I.  
1953 *Kul'tura naseleniya Gornogo Altaya v skifskoe vremya*, Moskva/Leningrad.  
1960 *Kul'tura naseleniya Tsentral'nogo Altaya v skifskoe vremya*, Moskva/Leningrad.  
1962 *Sibirskaya kolleksiya Petra I, Svod arkheologicheskikh istochnikov D3-9*, Moskva/Leningrad.
- So, J. F., Bunker, E. C.  
1995 *Traders and Raiders on China's Northern Frontier*, Washington D. C.
- Volkov, V. V.  
1967 *Bronzovyi i rannii zheleznyi vek Severnoi Mongolii*, Ulan-Bator.
- Zavitukhina, M. P.  
1998 Zolotaya plastina iz Zabaikal'ya v Sibirskoi kolleksii Petra I, In Savinov, D. G. et al. (eds.) *Drevnie kul'tury Tsentral'noi Azii i Sankt-Peterburg*, Sankt-Peterburg, pp.143-48.

#### 図版出典

- 図 1. 1 : 東京国立博物館ほか 2004, No. 63 転載 ; 2 : 鶴間和幸 2000, No. 75 転載 ; 3 : Bunker 1989, fig. 1, 朱ほか 1983, 図 1-1 転載 ; 4 : MIHO MUSEUM 1997, No. 110 転載 ; 5 : Bunker 1989, fig. 4 転載
- 図 2. 1 : So et al. 1995, Pl. 13 転載 ; 2 : 東京国立博物館 1997, No. 218 転載
- 図 3. 1 : Aruz et al. 2000, No. 195 転載 ; 2 : Bunker et al. 2002, fig. 48 転載 ; 3 : 中国青銅器全集編輯委員会 1995, 図版 107 転載 ; 4 : Borovka 1928, Pl. 61 転載 ; 5 : Batsaikhan 2004, No. 147, 148 転載 ; 6 : 田辺 1999, 図版 61 転載
- 図 4. 1 : Aruz et al. 2000, No. 64 転載 ; 2 : Reeder 1999, No. 50 転載
- 図 5. 1 : Rudenko 1953, ris. 82, 83, 172, 178, Barkova et al. 2005, ris. 1 をもとに作成 ; 2 : Barkova et al. 2005, ris. 2 をもとに作成 ; 3, 4 : Polos'mak 2001, ris. 151 をもとに作成
- 図 6. 1 : Barkova et al. 2005, ris. 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10 をもとに作成 ; 2 : op. cit., ris. 11, 12, 13, 14 をもとに作成
- 図 7. 1 : Piotrovsky et al. 1986, Pl. 163 転載 ; 2 : 江上ほか 1992, No. 50 転載
- 図 8. 1 : Rudenko 1953, ris. 181 転載 ; 2 : 中国美術全集編輯委員会 1988, 図版 211 転載 ; 3 : 陝西省考古研究所 2006, 転載 ; 4 : NHK 大阪放送局 1992, No. 5 転載 ; 5 : Boardman 2010, Pl. 11, No. 84 ; 6 : 済南市考古研究所ほか 2004, 図版 2-5 転載 ; 7 : 前掲書, 図版 2-1 転載 ; 8 : 安徽省文物考古研究所ほか 2007, 図 81 転載 ; 9 : 寧夏文物考古研究所ほか 1988, 図版 15-5.